

## ジョン・アップダイク（二）

### —少年期と母の存在—

岩 元 巖

#### (1) 母親リンダ・グレイス

アップダイクの父親、ウェスリーについては前章<sup>1</sup>で少しふれたが、東洋流に言えば一種の諦観を持っていた人だった。彼は妻の実家にくらがりこむような形でシリングトンの町に、そしてさらにプラウヴィルの村で暮し、やがて1972年に亡くなっている。高校教師として貧しく、家庭的にも妻の両親と共に生活していたのであるから、様々な不満を心の中に秘めていたはずだろうが、外にはそれを激しく見せることはなかったようである。町や村の人々とも親しく、誰とでも気軽に話し、生徒たちから尊敬はされていなかったが、親しみは持たれた人だった。彼は気むずかしかった義父母との生活も、気性の激しい一風変わった妻も、そして田舎の町や村の狭隘な精神もすべて許容する人物だった。

この父親が作家アップダイクにとって反面教師のような存在であったのに比し、直接に、しかもアップダイク少年をいわばこの田舎町の小さな環境から永遠に飛び立たせ、より大きな世界へと眼を向けさせる役割を果たそうとしたのが母親のリンダ・グレイスだった。

彼女はジョン・ホイヤーと、パークス郡では古い家柄であったクレイマー家の末娘ケイティ (Katie Kramer) との間に1904年に生まれ、父親の農場があったプラウヴィルで一人娘としてかなり裕福に育てられた女性である。前章で書いたとおり、才色兼備で1923年にノリスタウンの近くにあるアーサイナス大学を卒業すると、名門のコネル大学の大学院へ進み、翌年に哲学修

士号を得ている。当時の田舎町では珍しい知的な女性で、父親の強い反対で都会（ニューヨーク）へ出ていくことを阻まれたが、作家になることを夢見ていた。彼女が田舎の環境の中で孤立した存在であったのも無理のないことかもしれない。

彼女は1925年に、かつて大学時代に知り合っていたウェスリーと結婚した。当初は夫の任地であるオハイオ州へついていき、しばらくそこで暮らしたが、どのような事情があったかの、父母がシリングトンの町で新しい家を建てると、そこへ帰ってきてしまった。職を失ったウェスリーも彼女の後を追ひ、合流している。

彼女は故郷へ戻ると、シリングトンの中学校に職を得るのだが、わずか一日教えただけで、生徒たちに腹をたてて、家へ逃げ帰り、しばらくは家に引き籠っていたという。気が強く、誇り高き女性だったのであろうが、自らの能力を発揮する場を得ないまま、抑圧された感情を内にたぎらせていたのであろう。それが、彼女を一風変わった女性にし、家庭の中では夫や自分の父母（特に晩年パーキンソン氏病で動作の鈍くなった母親）に対して、激しい感情を爆発させたようである。

『自意識』の中で、アップダイクは幼い頃感じた激しい気性の母の印象を次のように描いている――

シリングトンの家のことを思いおこすとき、僕はいつも床の上に腹這いになって絵を描いているか、本を読んでいるか、あるいは食堂のテーブルの下に隠れているかのどちらかだった――それは僕の頭上でとびかう諍い、母の口から放たれるいつもの不満や叱責の言葉から自分を無縁な場に置いておくためだった。<sup>2</sup>

そして、彼は続けて「母の怒りの矢が自由の女神のあの冠のとがった剣先のようにとんでいった」とも表現しているほどだった。

リンダは息子のジョンを32年の春に出産すると、社会的にあまり意欲を見せなかった夫のウェスリーを家に残し、しばらくはレディングにあったポマロイズ(Pomeroy's)という百貨店に働きに出、布地類売場で働いた。<sup>3</sup> アップダイクが成長し、小学校に通う頃には夫のウェスリーがシリングトン高校の職を得ていたので、彼女は家庭の主婦として家にいたようである。ただ、小

説家になりたいという願望は捨てきれず、いつも自分の部屋に籠ってタイプライターを叩いていた。しかし、彼女の願いとは裏腹に送りだす原稿はきまって空しく返送されてきたそうである。

これは彼女の鬱積した感情をますます強めたに違いない。彼女の感情の爆発が家人へしばしばむけられたのも無理のないことかもしれない。しかし、彼女はその感情の矛先を息子のアップダイクにむけることはまずなかった。<sup>4</sup>むしろ逆に、彼女は自分と多くの共通点を持つ息子(アップダイクが生涯ひそかに苦しんでいた乾癬という皮膚病すら共有していた)に優しい感情を持ち、その才能を早くから認めていて、豊かな家庭事情でもなかったにもかかわらず、息子に不自由な思いを決してさせなかった。例えばの話、彼女は息子の衣類や靴などを揃えるにしても、必ずレディングの一流店に連れて行って買い求めていたし、映画が好きだった息子に週35セントの小遣いを与え、週に三度は映画館に行くことを許していた。<sup>5</sup>また、シリントンの名家の当主クリント・シリング(Clint Shilling)が画家でもあったことから、彼女はこの人物に頼み込んで、息子に早くから絵を習わせてもいた。

現在でなら珍しくもない話だが、息子の才能を認め、それを大切に育てようとする彼女の意欲は当時の田舎町ではかなり奇異に映ったはずである。こんなエピソードをアップダイクは書いている。

彼が乾癬という慢性的病気に生涯苦しんでいたことはすでに書いたが、小学校二年生の時、新しいクラス担任がそれに気づき、「まあこの子、頭にできているこれなあに？」と言った。この言葉に幼いアップダイクは同級生の前で身の縮む思いをした。彼は家に帰ると、涙しながら母にそのことを話した。すると、彼女の眼は「狂ったように激しく光り、翌朝には矢のようにまっしぐらに学校へ飛んでいき、くだんの教師を徹底的にやりこめた……」<sup>6</sup>という。

彼女の息子への愛着はそれほど強かった。息子の才能を認め、強い愛情を常に示していたにもかかわらず、彼女は息子が自分と同じように田舎町の小さな世界に閉じこめられてしまわないように心がけていた。この辺が、アップダイクが田舎町では奇矯な女と見られていた母を愛した理由でもある。彼はそういう母親の心情をライトモチーフとして「飛翔」(“Flight”)という初期の短編を形成し、その中で少年がより広い世界へと飛び立つことを自分の宿命として母親から植えつけられることを描いている。

## (2) 悲しい存在としての母

「飛翔」に登場する主人公アレン (Allen)<sup>7</sup> は、小学校の高学年になった頃、母親に連れられて町を見おろす小高い丘へ登る。そして、二人が頂上に至ると、母親はアレンに眼下に広がる町を手で示す。

すると、突然母は僕の頭の髪に指をさし入れ、いつくしむようにその手を置き、こう言った。「ほら見てごらん。私たちはみなあそこにいるのよ。そして、これからも永久にいることになるんだよ」と。母は「永久に」という言葉を口にするとき、ためらった。そして、また少しためらい、こう続けた。「でも、アレン、あんたは別だよ。あんたはこれから飛び立つんだからね」<sup>8</sup>

小説という虚構の中だけでなく、アップダイクの母親は「飛び立つ」ことができなかつた自らの宿命から息子を解き放たなければならぬと考えていたに違いない。母親としての愛着と、息子をその愛着から解放するという相反する心情は実際には難しいが、彼女はそれを懸命に実行する。息子としても、「飛翔」という与えられた宿命感に反発するはずであるが、同時にその宿命感と共に成長していかなければならぬ。これが「飛翔」という短編の主題を構成している。この作品については、後でもう少し詳しく述べるつもりである。

母親の話に戻ると、アップダイクの現実の母、リンダ・グレイスが作家を夢みていたにせよ、彼女自身敢然と広い世界に飛び立っていくだけの才能と気概をもっていたかどうかは少し疑問である。彼女は自分では若い頃の願望を直接的には父親に、そして間接的には社会的意欲の乏しかった夫のせいで断たれてしまったと考えているが、しかし、もしかしたらどこか心の中では自らの気概の無さ、才能の不足を密かに感じていたのかもしれない。彼女の激しい抑圧感情の表現はそこに由来していた可能性も大いにある。そのため、才能を認めた息子を自分をはるかに超える存在へと高める努力を惜しまず、自分の果たすことのできなかつた夢を息子に託すしかない悲しい女性になっていたのかもしれない。

息子であるアップダイク少年もそれを密かに感じとっていたふしがある。いや、少なくとも成長し、母の期待どおり成功した作家となった彼が自らの

原体験を振り返り、母の姿を思いおこし、一人の女としての母を冷静に見るとき、そこにとても「悲しい」存在であった彼女を描出したいと考えている。それが、彼が中期の短編「美術館と女たち」(“Museum and Women”)<sup>9</sup>に登場させる母親像である。

この短編は美術館をこよなく愛したアップダイク<sup>10</sup>が自分の生涯に強い印象と影響を与えた女性たち(母と奇しくも最初の妻を含めていた)を美術館を背景としてエピソード風に綴った三つの物語から成っている。その最初のエピソードが彼の母親を主人公としていて、しかも小説というより自伝的と言ってよいほどに、自分の母親を現実的に描いている。そのため、アップダイクが若かりし母親をどのように感じとっていたかが、『自意識』の中で描かれる母親像以上に鮮明に描かれている。少し長い引用となるが、ここに引用してみよう。

僕の母——彼女はこの美術館(レディング美術館のこと)と同じで、僕にとっては母としての範疇をみたくしてくれていた。ほかの女性を知らなかったから、総体的にも限定的にも、母と女性の代名詞として僕は母を受けとっていた。しかし、今になってみると、母もまた田舎町の女であったことがよくわかる。たしかに美しいものはたくさん具えていたが、多少それがごちゃまぜになっていて、都会から離れて生きてきたため、それが歪んでしまっていた。母は不思議なほどに、知識と無知、開放性と内向性を併せもつ女だった。

日曜日になると母は何度も僕を美術館へ連れていってくれたが、そこでどんな話をしたかという、ほとんどその記憶がない。ただ一度だけ、例の小さな銅像に僕が魅いられたようにみつめているのに気づくと、母は「この小さな像の人たちはとても悲しそうに見えるわね」と言った。母はそれらの像にちらっと眼をやっただけなのに、本当のところを言い当てていた。戦いに敗れたインディアンの像だけが悲しげに見えるのはなかった。……すべての像が悲しい宿命の中にとりこになっているように思え、僕は彼らをそこから救いだしてやりたかった。<sup>11</sup>

アップダイクはここでガラスケースの中に並ぶ小さな銅像の人々と母の存在を重ねてみせている。だからこそ、母は自分の悲しい宿命を息子に負わせ

ることがないように何度も何度も彼を美術館に連れていき、言葉にこそ出さなかったが「眼に見えないゴールにむかって僕を動かし……美術館のあの廊下のむこうに母自身がとても到達しえない光り輝く場所があることを僕に示そうとしていた」<sup>12</sup>と、アップダイクは感じていたのである。

彼の経歴を知る人には明らかだが、アップダイクは母親が期待したとおり、18歳の秋、奨学金を得てハーヴァード大学に入り、故郷の町から旅立っている。そして、彼はボストンの北、ケンブリッジの地で4年を過ごし、学生時代から文才を発揮し、卒業するとフルブライト留学生としてオックスフォードに留学、帰国後は *The New Yorkers* のスタッフ・ライターとして順調に文学の世界に入り、以後見事に「光り輝く」場所で(つまり大きな世界で)生きることとなった。

もちろん、故郷へは訪問のためにその後もしばしば訪れてはいるが、生涯かけて、生活のために故郷で暮すことはなく、1955年から2年間ニューヨーク市内に住んだことを除けば、ほとんどボストン近郊に居住し、アメリカを代表する作家として活躍した。見事な「飛翔」を成しとげたと考えてよい。

しかし、彼の母親への思慕と母親の側からの強い愛情を勘案すると、この「飛翔」は決して簡単ではなかったはずである。母親からしても、自らの期待の星である息子を簡単に解放することはできなかったであろうし、息子の方も、母親の期待を大きな重荷、自分を束縛する象徴と意識し、かえって反逆の道を選ぶこともありうる。このような、母と息子の愛着と葛藤を小説の「飛翔」はよく描き切っている。

### (3) 「飛翔」に描かれた母

アレン・ダウ(Allen Dow)は17歳の秋、突然に自分を、自身の行動や心の動きを第三人称で語るようになった。それは、モリー・ビンガマン(Molly Bingaman)といういい年下の恋人ができ、母に与えられた自分の宿命を意識してのことだった。「飛翔」はこういう書き出しから始まる。この初期の代表的な短編は、アップダイクが得意とする自己体験を厳密に辿りながら、虚構化したものであるが、その前半は、主人公が少年の頃、母から「宿命」として自分の育った田舎町からより大きな世界へ飛び立つという意識を与えられ、その大きな理由として、「飛び立つ」ことができなかった母親自身の半生を描いている。この意味では、「飛翔」の前半は主人公アレンの物語というより、

少年に「宿命」を与え、それに反発をする少年の気持をおさえこみ、あくまでも愛着を捨て、少年を解放させなければならない心情を持つに至った母親の物語りとなっている。

小説の後半は、少年が成長し、高校四年生の秋の出来事を語りながら、成長した息子が自分の期待通りに、小さな環境から飛び立ってくれるか、あるいはまた恋人を得て、そのまま小さな存在として田舎町に埋もれていくのか、それを恐れて、息子と恋人を拒絶しようとする母親の心情を背景に描いている。

主人公のアレンは三人の女生徒とチームを組んで、町から百マイルも離れた地にある別の高校で開催されるディベート競技会に出場するために出発する。この三人のうち二人は彼と同学年で成績優秀な女性たちだが、残る一人は一学年下のモリーで、美しく女性的で、町で古い家柄の娘だった。頭脳の点では、他の二人より劣っているように思えるが、アレンは当初からモリーと気が合い、最初の日、第一回戦でチームが勝利したことも手伝い、その興奮のせいもあって、その夜のパーティで二人は親密度を増していき、ついには二人だけで夜中まで語りあい、キスマでする仲になってしまう。アレンにとって、初めての本格的な恋となる端緒だった。

しかし、彼らが次のディベートに負け、故郷の町オリンガーの駅に帰ってきたとき、息子を迎えに来た母親は直感的に息子とモリーの新しい関係を悟り、彼女に激しい敵意を示している。彼女はこう言う――

「……アレン、つまらない女たちとつきあうんじゃないよ。そんなことしちゃ、あんたはこの大地にへばりつくことになるよ」

「母さん、僕は誰ともつきあってなんかいないよ。ほんと、母さんは想像たくましいんだから」

「そうかね、でもあの娘、列車から降りてきたときゃあ、顔をつんとあげ、カナリヤでも食べちまったと思ったね。それでさあこのやせっぽちのあたしの息子に、可哀いように鞆まで持たせてだよ。あたしのそばを通りすぎたとき、正直言って、あたしの顔に唾でも吐きかけるんじゃないかと思ったよ」<sup>13</sup>

実はこのモリーに実在のモデルがいる。アップダイクは『自意識』の中で

ノラ(Nora)という名の一学年下の恋人がいたことを明らかにしている。<sup>14</sup> アップダイクはいわゆる本当の意味での初めての恋人はノラで、小説の中のモリーとは違い、頭も良く、かつ繊細で、身体もすてきで、アップダイクのことをとても好いてくれていたようである。肉体的な関係までには至らなかったが、高校生同士の愛情関係としては限界に近いところまでノラはアップダイクに許していた。彼は次のように書いている。

……彼女(ノラ)はこの上なくかぐわしく、巧みで、僕の望むままにしてくれた。だが、僕達の若さと処女性ということを考えれば、彼女は女性が男性にしてあげられる限りのことをしてくれた。<sup>150</sup>

だが、アップダイク自身も、自分を律して彼女の中にゆったりと落ち込むことをしなかった。というのも、彼にとっての「完璧なる女性はシリングトンから僕を引きはなしてくれる女で、僕をそこに引きずりおろす女ではなかった」からだ、と続いて述べている。母親から与えられていたこの意識を現実のアップダイクは忠実に守ったが、そこには複雑なものがあつたはずである。だから、彼は虚構としての「飛翔」に自らの分身であるアレンにこの心情的複雑さを演じさせることになっている。

アレンはモリーへの愛は故郷への愛と結びついて、自らの飛翔を阻むものか、あるいは母の自分への所有欲からの解放を象徴するものか思いとまどっている。友人も、先生方も、そして両方の家も、彼とモリーの関係に反対の意を明らかに表明する。だから、それに反発するように彼はモリーを求め、また拒否する。好きでいながら、しばしば仲違いをする。そして、仲違いの後、二人は激しくお互いを求めあう。思春期の物語として、この小説の後半は若すぎる二人の恋愛をよく書き表している。

だが、飛翔の宿命を幼い頃から負わされているアレンは決断ができない。飛び立たいカナリヤをのみこんで、満足しきった猫とモリーのことを表現した母親は息子に決断を迫るように、「思い切って彼女と結婚するってあたしに言うなら、もうこれ以上いろいろ言わない」<sup>16</sup> と言い、「おまえがこういう弱さを見せることは意外だったね」とつけ加えている。

この皮肉な言葉はアレンを激昂させる。息子が初めて恋した女性を拒み、なげやりな言葉で最愛の息子の心を傷つける母は、あくまでも言外に息子に



むかって宿命の実行を迫っている。アレンは一瞬、母のその激しさに憎悪をたぎらせ、「わかったよ。母さんの勝だ。でも、もうこれっきりだ。母さんの言いなりになるのは」と言うのである。<sup>17</sup>

母はこれを受けて、メロドラマチックに「さようなら、アレン」と応じ、物語は終る。ただこの言葉の余韻は、おまえが宿命を実行するなら、嬉しい限りだが、母さんともお別れになるのだね、そしてまた、おまえが女と結ばれて宿命を、つまりは、母さんの期待を裏切れば、もう縁切りだね、という二つの意味を残していくものだった。

アップダイクの現実の母親もそういう人だったのであろう。厳しさと愛情、強い所有欲(愛着)とそれと相反する息子を広い世界へ解放しなければならぬという使命感を持っていた女性であったのだろう。この母親から植えつけられた宿命としての「飛翔」の意識がなかったなら、実は作家ジョン・アップダイクの誕生もなかったかもしれない。

## 注

1. 『麗澤レビュー』14号における拙著「ジョン・アップダイク——作家形成の背景」(pp. 139-148)を参照。既出の固有名詞の原名はその章に出してある。この章では新しく出るものに限り、原名を示す。
2. *Self-Consciousness*, p. 84.
3. *Ibid.*, pp. 11-12. 「幼い頃の僕の母の印象は若くて、ほっそりとした女性だったというものだった。……それは母がレディングの大きな百貨店ポマロイズの布地類売り場で店員として働いていた日々の記憶からだった」と記している。
4. *Ibid.*, p. 84. 「母の怒りが僕にむけられることはまずなかった」とある。
5. *Ibid.*, p. 28. アップダイクは衣服は母が *Croll & Keck* という店で、靴は *Wetherhold & Metzger* という店で買ってくれた、と記している。当時アメリカの小都市では、商店にも社会階層の意識が強く反映されていた。上層の人々はある特定の店で必要品を取り揃えたものであり、どこの店で物を揃えるかで、その人々の社会階層が問われていた。
6. *Ibid.*, p. 46.
7. アップダイクは自分をモデルとした少年主人公たちにいくつかの名前を使っているが、好んでいたのは *David* ではなかろうか。自分の長男にこの名前をつけている。

Allen や Peter も好んで使った名前である。

8. John Updike, "Flight" in *Pigeon Feathers* (New York: Alfred A. Knopf, 1962), p. 50.
9. John Updike, "Museum and Women" in *Museum and Women* (New York: Alfred A. Knopf, 1972).
10. アップダイクは美術館を訪れるのが大好きで、どこに旅をしても、その地の美術館を必ず訪れている。その結果、絵画評も一流で、*Just Looking* (New York: Alfred A. Knopf, 1989)という絵画評論集も出版している。その本の冒頭で「僕にとっての最初の美術館は母と一緒によく訪れたもの」と記し、それがレディング市の美術館だったことを明らかにしている。
11. *Museum and Women*, p. 5.
12. *Ibid.*, p. 6.
13. *Pigeon Feathers*, p. 65.
14. *Self-Consciousness*, p. 37. ただ、Nora のラストネームは記していない。名前は架空のものかもしれない。彼女はどこか遠くへ越して、アップダイクが自伝を書いた時点では、家は昔のままだったが、ノラの家族はもうそこに住んでいなかったようである。
15. *Ibid.*, p. 37.
16. *Pigeon Feathers*, p. 72.
17. *Ibid.*, p. 72.